

右足が痛い。雨が降るってわかってたのなら長靴をはいてくれば良かった。それにしてもこれからどうしたものか。家に電話しようにもスマホの電波が届かないし。

私は空を見上げる。木と木の隙間から雨が落ちてくる。空は昼間だというのにどんよりと暗い。

あいつが消えた。

とは言っても年に数回、ふらつと姿をくらませては暫く帰って来ないなんてことはざらにある。あいつはそんな男なただけだ。ただ、今回の場合は違ってた。あいつの家のリビングテーブルの上に、私が一月前に置いたアソートチョコの袋がまだそこにあつた。そんなことは今までに一度だつてなかったことなんだ。

かつて、私の父親だったあの男、狩山吉雄はとある地方大学の教授先生だ。研究するのは宗教学。小さいとき私は近所のどこへ行っても、先生のお嬢ちゃんとしてちやほやされた。

あいつが海外の有名な神学者を扱ったテレビ番組に解説者として出演した翌日などは、校長先生から直々にお褒めの言葉を頂戴したものだ。

そんなあいつが壊れたのは忘れもしない、私が小学5年生の夏のことだ。家族三人で海に行った帰り私たちは交通事故に遭った。飲酒運転

の車が対向車線をはみ出して来たのを避けようとして、あいつがハンドルを切りすぎたんだ。車は横転して全ての窓ガラスが砕け、私はあと一步で致命傷だったと医者に言われた顎から首にかけての傷と、右腕上腕骨の複雑骨折を負ったわけだ。

母も負けず劣らずな重症だったが、二人とも幸い命にかかわるような怪我にはいたらなかった。

私は一度だつてあいつの運転を責めたことはない。悪いのはすべてあのクソみたいなアル中のトラックドライバーだつてことくらい分かつてる。私が許せないのはそのあとのことだ。

事故の後あいつは8日と16時間眠りつばなしだった。本気で心配したさ。それまでの私はといえば、大学教授の娘っていうステイタスとともに生きてきたいわばお嬢様だ。もしこのままあいつが目覚めなければそのステイタスを失い、普通の人間になってしまう。もう校長先生からお褒めの言葉をいただくチャンスもなくなってしまう。

私は毎日神様に祈ったさ。どうか私の父を目覚めさせてください。私を凡庸なその他大勢と同じ子にしないでくださいって。

祈ったかいがあつてか、あいつは目覚めた。私は泣いた。うれし泣きじゃない。心底ほつとしたからだ。だけど、あいつはそれから変わったんだ。

退院して家に帰れるようになると、あいつは本を買い漁っては部屋に引きこもるようになった。それまで最低でも一日一回は家族と顔を合わせて食事をするのをモットーにしてきた人間が、一週間に一度として食卓に出てこなくなつた。母や私が部屋に入ろうとすると激しく怒り、ついには扉に自作の鍵まで取り付ける始末だった。そうかと思うとふらつといなくなり、一週間以上帰つてこないのだ。

大学からほかの教授が心配して家に来たけど、取り付く島もなく帰

って行った。そんな生活が1年たち、2年たち、母はどんどんやつれていった。

そして三年目に母は私をつれて家を出た。その時を境に私は普通の女の子となったわけだ。

「あつ、紗希ツイッターやってるの？」

美春が私のスマホをのぞき込んでくる。ポニーテールに束ねた黒髪が私の顔の前に垂れて不快このうえない。

「ちよっと邪魔見ないでくれる。あつち行つて」

半年前から私は母の再婚相手の男とそのつれ子の3人と暮らしている。つれ子の美春は私よりも3つ年下の中学生なのだが、どうやらこのガキは私を姉として敬おうって気は微塵もないようだ。

「ふーん、フォロワーが一人もないんだ。さみしいの。つていうかさなんでもやってみて楽しい？」

「いつも上から視線で物を言う態度が腹たつことこのうえない。」

「うるさいわね。私はどう使おうが勝手にしろよ」

「アカウント名見ちゃったし、フォロワーしてあげよっか」

私が無視するのもかまわず、美春は自分のスマホを手慣れた手つきで操作する。

「へへへ、見つけちゃった。ローズだって。薔薇のアイコンとかちよつとかっこつけすぎじゃない？」

美春がにやにやと笑う。私はこの女との間に見えない壁をこしらえて、何も聞こえないふりをする。

「じゃあ、フォローします。えいっ…て、あれ…鍵かかてるし」

私が無反応を決め込んでいるのを見て諦めたのか、美春はぶーたれながら冷蔵庫の中のアイス漁るとリビングを出ていった。私はほつ

としつつ、最近あったことをツイッターに書き込んでいく。

ツイッターには時教に制限があるため、変に長文にならずに日々あったことを記せる。だから私にとつては日記に調度良いのだ。日記である都合上他人に見せたくないの、私は自分がツイッターに書いた内容の公開設定を非公開にしている。そのことに気付いた美春が「鍵がかかっている」と言ったのだ。私が美春からのフォロワーリクエストを承認しなければ、あいつが私のつぶやいた内容を見ることはできない。

私はここ数日の間にあったことを一通り書き終えたので、あらためて読み直してみる。

《今日は第一月曜日。登校前にスーパーでいつものチョコの詰め合わせを買おうとしたら、珍しく売り切れていた。しょうがないから、ちよつと高いけどコンビニで同じものを買おう》

《おかし。一月前に私が持って来たチョコはまだテーブルの上にある。隣の花山さんちのおばさんがしばらくあいつとは顔を合わせてないと言っていた》

《お母さんにそのことを伝えようかどうか迷う。きつとあいつのことなんか聞きたくもないだろうし、私が毎月あの家に行っていることを知ったらどう思うかわからないから》

《明日もう一度あいつの家に行ってみることに決めた。あいつがどこで野たれ死んでようが構わないけど、私にはそれを知る権利がある。まあ死んでるっていうのは考えすぎかもしれないけど》

翌日私は学校の帰りにあいつの家に寄った。リビングのテーブルには相変わらずチョコの袋が置かれている。あいつと母が離婚してからというもの、私がこの家に来た時にうるつくのはせいぜいリビングのある一階のみだった。あいつがいない時間を見計らって来ているとはいえ、何かしらの遠慮が私の中にはあるのだ。

その自作のルールは昨日すでに破った。あいつが孤独死してないか確認するために家の中を一通り見て回ったからだ。ただ一つの部屋を除いて。

私は二階のあいつの部屋の前へ行くと、鞆からホームセンターで買ったボトルカッターを取り出す。あいつの部屋の廊下側にはご丁寧に南京錠がぶら下がっているのは昨日確認済みだ。一人住まいのくせに鍵をかけるとか、どれだけ被害者意識が強いんだよ。

南京錠はいとも簡単に切ることができた。私はドアを開けるとライトのスイッチを探して押した。部屋の中は想像以上に狂っていた。

トイレで二回吐いた。あいつは私がここに入るのを見越して、驚かせようと準備してたんじゃないかとすら思った。でも違う。あいつは本気だ。

あいつが研究していたのは悪魔とか霊とかそんな類のものだ。そして壁中に貼られていたのは、世界各国の雑誌や新聞の切り抜きで、どうやらそれらは死者を蘇らせるための儀式に関するものだった。中には作り物なのか本物なのか判別できない人間の身体の一部が祭られているものもあった。

私は今すぐこの部屋を出たい衝動にかられつつも、根気よくあいつの足取りをつかむための手掛かりを探した。パソコンにはパスワードがかかっている調べることはできない。試しに私と母の名前を入れてみたけどダメだった。

途方にくれていると、本棚に一冊のアルバムを見つけた。ケースから取り出してめくってみると、かわいらしい赤ちゃんの写真が入っていた。その子供は明音という名前で、ページをめくるとに少しずつ成長していった。

この子は誰？私はほとんどページをめくる。禍々しい部屋にあって、このアルバムのなんと心安らぐことだろう。最初赤ちゃんだった明音は、そのうちハイハイするようになり、そして次のページでは立ち上がった子犬を抱き上げるまでになっていた。

するとアルバムはそこで突然写真がなくなり、いくらめくってもただ写真を入れるためのビニールが貼られた紙が現れるだけだった。諦めてアルバムをケースに入れようとしたところ、最後のページに大きな写真が入っていることに気付いた。その写真は明音とその両親の家族写真だった。私は目を疑った。明音の父親は若き日のあいつだったからだ。

家に帰った私は自分の部屋の窓を開けると、ベッドの下に隠してあったタバコを引っぱり出した。考えが煮詰まったときはこれに限る。窓から見えるのは味気ないマンション群。地上十三階のこの部屋の窓から初めて外を見たとき、私はもう引き返せないとこに来たんだなあってつくづく思った。私が生まれ育った、あいつが今では一人で住んでいる（住んでいたと言った方が今では正しいのかも）あの家は2階建ての一軒家だったから。

「紗希さあ、明日知美と出掛けるんだけど、良かったらあのピンクのバック貸して！」

部屋に突然入ってきた美春が私の吸ってるものを見て一瞬固まる。「バッグ持って行っていいわよ。その代りこのことは黙ってて！」

美春は私の言うことが聞こえないのか、こっちをじっと見つめて固まっている。大きな目がさらに大きく見開かれたかと思うと、ポケットからスマホを取り出してそのレンズを私に向けてくる。私は駆け寄るとそれを奪い取った。